

前期：現代キリスト教思想研究1——近代から現代へ

オリエンテーション——現代キリスト教思想の諸動向

1. 西欧近代とキリスト教
2. 自由主義神学1——シュライアマハー
3. 自由主義神学2——リッチェルとハルナック
4. 自由主義神学3——トレルチ
5. ヘーゲルとヘーゲル主義
6. 近代聖書学と宗教史学派 5/30
7. キリスト教と社会主義 6/6
8. 弁証法神学1——バルト 6/13
9. 弁証法神学2——ブルトマン 6/20
10. 弁証法神学3——ティリッヒ 6/27
11. 解釈学的神学とブルトマン学派 7/4
12. 研究発表 7/11
13. 研究発表 7/18
14. 研究発表 7/25

<前回>トレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923)

(1) リッチェル学派からの離脱

1. リッチェル批判
 - ・「A・リッチェルから学んだこと」：「教義的伝承の判明な把握」「近代の精神的宗教的状況の同様に判明な把握」（森田、219）
 - 「トレルチは、リッチェルにおけるこの二つの要素の統一にたいして疑念をさしはらむ」
2. 基本的課題「「近代世界をいっそう率直に検討することによってキリスト教的理念世界を徹底的に思惟し、明確に系統的に述べること」「キリスト教的理念と近代世界との関係が倫理的次元の問題に深く根ざしていることを見いだした」（219）
3. 『社会教説』(Die Soziallehren der christliche Kirchen und Gruppen, 1912)
 - 福音→各時代における国家、経済、家族、社会などをめぐる諸教説
 - 諸類型（理念型）：教会(Kirche)、分派(Sekte)、神秘主義(Mystik)
5. 『<キリスト教の本質>とは何か』(1903) cf. ハルナックとその教理史
 - 批判としての本質、発展としての本質、理想としての本質
6. 古プロテスタンティズム、新プロテスタンティズム

(2) 宗教史学派の神学

7. 「教會的神学から自由な宗教哲学に正しく基礎づけられたキリスト教神学」、「教會的伝統から全く自由な立場において近代的学問意識において正しく位置づけられた神学」の構想（佐藤、169）、シュライアマハー、リッチェルの線上。
8. 歴史的方法の特徴：方法、認識、存在、歴史主義
 - ・批判(Kritik) ・類推(Analogie) ・相互作用(Wechselwirkung)あるいは相関(Korrelation)
9. 「宗教史学派の教義学」(Die Dogmatik der "religionsgeschichtliche Schule", 1913)

↓

伝統的な教義学の解体、『信仰論』

(3) カント的な宗教哲学の構想

10. 心理学と認識論 → カントの批判哲学による解決
11. カント主義の拡張 cf. 波多野
 - 認識論のみがアプリアリではない。精神活動の諸領域のアプリアリな構造。

宗教的アプリオリ、この宗教的アプリオリが現実化する（心的現象）

↓

cf. ユングの元型（林道義）

12. 宗教の本質：

（４）歴史主義の諸問題

13. 歴史主義と歴史相対主義

↓

14. キリスト教の絶対性（普遍史）からヨーロッパ的文化総合へ

・歴史相対主義はニヒリズムか？ cf. H.R.ニーバー（『啓示の意味』）、パネンベルク

5. ヘーゲルとヘーゲル主義

（１）ヘーゲル哲学の意義

1. ヘーゲル哲学の魅力あるいは意義

- ・歴史意識に合致した包括的な論理体系（一貫性と包括性）
- ・伝統を統合し歴史を説明する能力、多産性

2. 三位一体論的哲学

「ヘーゲルは神学に、少なくともプロテスタント神学に、三一論を課題として返還した。合理主義においても感情神学においても、三一論は広く忘れられてしまっていた。しかるに三一論にとってのヘーゲルの意義は、神学へのこの影響のうちにあるのではなく、その意義は、彼が三一性を同時に哲学的課題として開陳した——三一性哲学を意図したという点にある」（イエシュケ、118）。

（２）ヘーゲル主義の系譜

3. ヘーゲル的総合とその破綻

ティリッヒ：諸潮流の対立の克服＝総合、総合の努力と破綻

実存＝現実的生は思惟の内的世界に閉じ込めることはできない、言語とその外部

4. ヘーゲル右派と左派

・狭義には、1830年代を中心に、ヘーゲルに学び影響されて哲学を展開した思想家たち。広義には、ヘーゲル哲学によって何らかの影響を受け、あるいはヘーゲル哲学を専門にしている人々。現代にまで及ぶ。

・シュトラウスの『イエスの生涯』をめぐり分裂。シュトラウスのキリスト教解釈を認める左派（青年ヘーゲル派）、部分的に認める中央派、否定する右派（老ヘーゲル派）。

・左派（青年ヘーゲル派）：ダーフィット・シュトラウス、ブルーノ・バウアー、マックス

・シュティルナー、ルートヴィヒ・フォイエルバッハ、カール・マルクス、フリードリヒ

・エンゲルス、ミハイル・バクーニン、フェルディナント・ラッサール、モーゼス・ヘス、

アルノルト・ルーゲら。

（３）バウルとテュービンゲン学派

フェルディナンド・クリスチャン・バウル（Ferdinand Christian Baur, 1792-1860。バウア）

ドイツの神学者、初代教会史家。1826-60年にテュービンゲン大学教授。テュービンゲン学派（若い頃のリッチェルを含む）の指導者。シュライアマハーの弟子であったが、のちにヘーゲルの弁証法的歴史哲学の影響を受けて、原始キリスト教の展開を説明した。

5. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』

第三章 「歴史的運動としてのキリスト教（F・C・バウルの神学的歴史理解）」

・バウル

第一期：準備時代（1835年ごろまで）

第二期：教理史および原詩キリスト教の研究の時代（1835-50）

第三期：キリスト教に起源、本質、および教会史の研究の時代（1851-1860）

・第二期、二つの研究方向（思弁的方法の強調のもとに歴史全体の把握をめざす教理史研究と、歴史的批判的方法の強調のものに原始キリスト教を遡源する実証的研究）が平行。

「じつは根本的に同一の方法」「教理史的研究における思弁的方法」は「歴史的批判的方法によって裏づけられ」、「原始キリスト教史研究における歴史的批判的方法」は「思弁的方法によって根拠づけられ統一されている」（113）

・「精神史としての教理史」、「教理史とはドグマ(Dogma)の運動の全体」「キリスト教の「神的所与の真理」」（114）

ドクメン(Dogmen)の形姿、即自的存在から対自的存在へ
即自的かつ対自的存在へ復帰

ドグマの弁証法的運動としての教理史＝ドグマについて思惟する主観的運動
精神の運動として同一の運動

教会の内面性を支える聖霊の働き

↓

「具体的叙述を跡づけるとき、この教理史の精神がキリスト教的聖霊の歴史超越的な神的作用の側面をほとんど欠き、むしろ教会ないし信徒の内面性に与えられた賜物として働く歴史内在的な運動力であること」「神的精神の自覚過程は、同時にまた人間精神の自覚過程である」、「かかるきわめて楽観的な無媒介的な確信がパウルに前提されている」（115）

ヘーゲル哲学の枠組みのキリスト教史・教理史への適用

精神の自己実現の運動＝教理史

ヘーゲル哲学と近代歴史学の予定調和

・宗教改革の解釈：たんなる根源的なものへの復帰ではなく、「自由の意識」

「ドグマの絶対的な確かさが主観的意識においていま一度問いなおされるのである」、「ドグマが自己自身を解放し、新しい課題を賦与した」「この新しい課題は歴史の発見を意味した」、「主観的意識へと媒介された客観的ドグマ」「伝統的教理にたいする批判と真の権威の探究」、「宗教改革と歴史理解とは必然的に共属する」（116）

「信仰の自由」、「新しい原理への前進」、「プロテスタンティズムは「前進する解決において理解される課題」であり、つねに道程である」、「思索しつづける者」、「宗教改革以降、神学は未完結の歴史運動をつづける批判的学問へと発展し、ドグマの客観性は主観的客観性となったと、パウルは考える」（117）

「信仰は教會的教理をそのまま真として認容すること」ではなく、「歴史的に制約された真理理解、真理受容を意味する」、「自己意識としての信仰は」「自己に満足する精神運動となり、精神における自己確信的意識の自己媒介となってしまう」（118）

・「パウルの聖書観」、「聖書自体をして聖書を語らせる」、「それがためには聖書はまず伝統的権威から解放されて、歴史的資料とならなければならない」、「第一の歴史的資料として聖書研究から第二の聖書の精神の理解へと進む手続きが、歴史的批判である。かくて歴史的批判を実行しない者はプロテスタンティズムの敵であるとまでパウルは語るのである」（122-123）

「結果」と「意図」。

・「自由と絶対的依存の相互否定的媒介は、絶対的精神の働きにおいてのみ成立するので

ある」

正統主義神学：人間の自由な批判的自己活動を閉ざして啓示の自己開示のみを容認
合理主義的神学：啓示の光を拒否し、これを人間の本質に内在化させて人間の自由の
自己活動のみを強調

↓

ともに絶対的精神によって否定されることを通して、絶対的精神の自己実現にお
ける自由と絶対的依存へと止揚され、歴史的統一へと高められる。

↓

「恩寵と自由に関する問題性の深みは、バウルでは十分に汲みつくされていない」
「自己運動の観念論といった傾向」(125)

図式の反復、「理念は歴史の本来的な力である」

・「原始キリスト教の遡源的研究」

「パウロ研究を通して、原始キリスト教におけるユダヤ的キリスト教とパウロ的普遍主
義的キリスト教との対立の事実に着目し、使徒時代を両者の対立時代と見なし、使徒以後
の時代を両者の媒介調停的發展の時代と見なし、いわゆるパウロの手紙をそれぞれの「傾
向」によって対立と媒介調停的發展史上に位置づけ、あわせて著者問題をも決定する」(127)

「マタイはイエスの歴史的事実を伝える最古の信頼すべき福音書である」(128)

マタイ→ルカ→マルコ

・「バウルの歴史的関心に問いかけ、問題意識を旨めさせ、キリスト教の歴史がみずか
らを語り始めるように働いた先理解が、ヘーゲル哲学であったといえる」(141)

・「歴史的キリスト教あるいはキリスト教の歴史を全体的に理解しようとする試みは、そ
れぞれの神学者の存在論的思考と密接に関係する。バウルからハルナック、トレルチに至
る線は、ブルトマンおよびバルトに比較されるとき、歴史的キリスト教をしてそれ自体と
して語らしめるようとする基礎的思考において一貫している。したがって、その線上にお
ける進歩は原理的進歩というよりは原理応用の進歩といえるであろう」(158)

歴史（人間、共同的生の活動領域）という問題の地平におけるキリスト教思想

しかし、歴史的思惟自体が、複合的であり、錯綜している。

歴史的批判的方法、ヘーゲル主義、そしてグリム（物語としての歴史）

<参考文献>

0. シュトラウス (David Friedrich Strauss, 1808-1874) 『イエスの生涯』
『イエスの生涯・緒論』(世界書院)、『イエスの生涯』(I)(II) (教文館)
1. Stephan-Schmidt, *Geschichte der evangelischen Theologie in Deutschland seit dem
Idealismus*, de Gruyter, 1973.
W. Pannenberg, *Problemggeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von
Schleiermacher bis zu Barth und Tillich*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1997.
2. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社、1972年。
3. W.イェシュケ『ヘーゲルの宗教哲学』早稲田大学出版部、1990年。
4. K.レーヴィット『ヘーベルからニーチェへI、II』岩波書店、1952年。
5. ヘルベルト・シュネーデルバッハ『ヘーゲル以後の歴史哲学』法政大学出版局、
1994年。
6. マルクス／エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』(廣松渉／小林昌人) 岩波文庫。
7. 堅田剛『法の詩学——グリムの世界』新曜社、1985年。